

どう見る？ 子どもの行動

子どもたちが日々見せてくれるさまざまな行動について、発達上の理解と援助という観点から解説します。

園内研修 保護者への情報提供にご活用ください。

今回のテーマ **けんか**

解決方法を考えることで その子も周囲の子も育てる

アカネちゃんのこと、嫌いになったんじゃないよ！

5歳・秋

5歳のアカネの母親から、担任が相談を受けました。その内容は「アカネが『友達に嫌われたから園に行きたくない』と言っている」というもの。担任も、

それまで仲良しだった3人のうち、アカネがひとりでしょんぼりしていることが多いのに気づき、気になっていたところでした。



翌日、アカネに尋ねると、「3人でダンスをしていたとき、『踊り方が違う!』と言われた」「私だって一生懸命なのに、どこがいけないの?」と口げんかになったと言うのです。



アカネは「もう一緒に遊べないと思ったら悲しくなった」と続けます。担任は「寂しかったね」とアカネの気持ちを受け止めたうえで、ふたりを交えて話すことにしました。



ふたりは何気ない言葉がアカネを悲ませていたことに驚きました。「嫌いになったんじゃないよ。ごめんね」と言い、アカネもふたりの気持ちがわかったようでした。



最初は互いに緊張していた様子ですが、ほっとした表情になり、また一緒に遊ぶ姿が見られるようになりました。母親からも安心した旨の連絡がありました。

こうした子どもの行動の意味を、どう見ますか？

発達に
とっての
意味は？

感情が高ぶって収められずに 言い合いがけんかになることも

いざこざが比較的単純な行き違いから生じるもめごとなのに対して、けんかは傷ついたり、相手への嫌悪感がたまったりして長引くこともあります。3歳ごろでは、ものの取り合いなどささいなきっかけでぶつたりけつたりしてけんかが始まりますが、これは言葉で状況を説明できないためによく起こります。4歳ごろになると言い合いから始まることもありますが、結局手が出てしまうことがよくあります。5歳くらいになると、言葉で感情をぶつけるようになりますが、感情が高ぶってくるとつかみ合いになることも。腕力が強い分ケガをする危険性も高くなるので注意が必要です。また、片方に同調する子、仲裁を試みる子なども出てきて、自分たちでは収拾できず、大人の仲介が必要になることもあります。



大人の
サポートは？

悔しさやつらさに共感してから 原因に迫っていく

3、4歳のころは、けんかの原因を当人同士でもわからなかったり、うまく説明できなかったりするものです。そこで、まずは双方の感情の高ぶりが収まることを優先しましょう。「悔しかったね」「痛かったね」と双方に共感を示すことで、「大好きな先生が自分の気持ちを分かってくれている」と安心感を得ることができます。まさに子どもとの日ごろの信頼関係がものをいう場面です。そのうえで、なぜこのようなことが起こったのか、子ども自身が振り返るように働きかけます。

5歳ごろになると、原因を子ども自身が理解し、説明できるので、子ども同士で解決できることも増えてきます。ただしその際、「謝りさえすれば済む」という構図にしてしまわないことが大切です。双方にわだかまりが残らず、また一緒に遊べる関係に戻

れたかを見極め、不平や不満が残らないように、その場で当事者が了解できるようにしましょう。

保育者にとっては、けんかの解決はクラス全体への指導の機会につながるものです。していいこと、いけないことをけんかの当事者が気づくような援助をすることがポイントです。保育者のそうした姿から、周囲の子どもたちも判断の基準を学んでいます。このことを忘れないで適切な言葉かけを行ってほしいと思います。

